

日本中東学会ニュースレター

**JAMES
NEWSLETTER**



No.111
7/30 2007

目 次

第12期会長就任にあたって	1
第1回日本中東学会奨励賞を受賞して	3
日本中東学会第24回年次大会のお知らせ	4
理事会・総会報告	5
第23回年次大会報告	10
『日本中東学会年報』(AJAMES)編集委員会報告	31
『日本中東学会年報』(AJAMES)掲載論文へGoogleでアクセス!	33
会員の異動	35
寄贈図書	37
2008年度会費納入のお願い	38
事務局より	38

第12期会長就任にあたって

第12期会長 私市 正年
(上智大学外国語学部)

1. 日本中東学会の歩み

日本中東学会の第1回大会が行われたのは1985年4月6日～7日、東京駒場の東京大学に於いてであった。この創立記念大会を伝える、黄ばんだ「ニュースレター」1号(6月1日発行)を見ると、大雑把な内容で7ページの薄い冊子ではあるが、かえっ

てそれが初々しい学会の雰囲気を与えている。その10年後の1995年の第57号は 10周年記念大会に関する記事を掲載している。冊子は 24 ページにふくらんだだけでなく、学会活動の発展を示す6会場37人の個別の研究発表とは別に、「アジア・アフリカにおける中東・イスラーム研究の新地平」と題するシンポジウムが生まれ、インドネシア、エジプト、韓国などからの研究者が報告を行っている。ここからは日本の中東学会が国外にはばたきつつあることがはっきりと見てとれる。同誌に日米地域研究会議の開催や日本・アラブ関係国際共同研究国内委員会に関する知らせが掲載されていることも同じ方向を示すものといえよう。

中東学会のこうした流れは、この2年後の1997年度より始まった文部省プロジェクト「現代イスラーム世界の動態的研究(略称:イスラーム地域研究)」によって発展され、本プロジェクトが終了した 2002 年には日本の中東研究者や中東学会が国際的ネットワークと結びついたといえる。

創設から 20 年たった 2005 年7月6日付発行の第104号には、第 21 回年次大会の報告とともに第 6 回アジア中東学会(AFMA)東京大会や第 2 回中東学会世界大会(WOCMES)ヨルダン大会などの案内文が掲載され、文字通りに世界に開かれた日本中東学会の様子が具体的に伝えられている。会員数は 2007 年 3 月末現在で 705 名に達し、中規模の学会としての地歩も確立したといえよう。

2. 日本の中東研究の方向と課題について

以上のような学会の歩みをふりかえって、今後の日本の中東研究の方向と課題についていくつか提言とお願いをしたい。

第一は、国外への知識・情報の発信を一層促進することである。日本の中東研究者やイスラーム研究者が国外の学会等で報告をするのは珍しくなくなったが、まだその成果は十分には伝えられていない。海外の研究者との交流はもとより、諸外国語での論文執筆、海外での学会発表を積極的にすすめる必要がある。また「地域」の理解のためには、現地研究者との現地語(アラビア語、トルコ語、ペルシア語など)での意見交換もさらに進めるべきであろう。欧米と中東地域との関係は、政治や宗教をめぐるますます難しい状況になっているだけに、それとは一線を画す日本の研究者の重要性がますます高まっているように思える。

第二は、言い尽くされていることであるが、専門地域とディシプリンを互いに越境する地域研究の原点にたった研究をめざしていただきたい。個人的体験を述べて恐縮ではあるが、私の場合、近現代アルジェリア史(フランス植民地史)研究からスタートし、中世の聖者崇拜やスーフィー教団の研究、現代市民社会論、イスラーム主義運動というようにテーマのぶれはかなり大きかったが、今、考えるに個別の実証研究と全体的理解の往復運動をつねに頭におきながら研究することができたと思っている。これは地域研究者の長所ではないかと考えている。日本の中東・イ

スラーム地域の研究者は、諸外国のそれと比べて、地域、時代、ディシプリンの異なる者どうしの相互交流が活発である。これは地域研究にとって好都合なことである。願わくは、この交流を一層、活発化させていただきたい。実証的文献学者と現代研究者が不断の交流を積み重ねることにより、日本ならではの中東研究をさらに発展させることができると考えるからである。

第三は、中東研究の拠点構築をめざして努力することである。欧米諸国の中東研究は、国内だけでなく、現地中東の諸国に研究所やセンターをもって進められている。それと比べて日本の中東研究の足場はきわめて脆弱である。幸いにして 2006 年度より「イスラーム地域研究」プログラム(人間文化研究機構)が開始された。本プログラムは、通常の科研費プロジェクトとは異なり、フランスの CNRS(国立科学研究センター)をモデルにして日本に中東研究の拠点形成をめざしている。早稲田大学、東京大学、上智大学、東洋文庫、京都大学が拠点形成の柱に指定されているが、本プログラムは大学間の競争ではなく、多様な大学研究者の協力が期待されている。日本の中東研究の拠点構築と発展のために会員諸氏の積極的な参加をお願いしたい。

第 1 回日本中東学会奨励賞を受賞して

青柳 かおる

(東京大学大学院人文社会系研究科助教)

このたびは、日本中東学会奨励賞という大変立派な賞をいただくことができまして、とてもうれしく、光栄に思っております。私の研究を指導し励ましてくださった先生方、先輩方、友人の皆様に深く感謝申し上げます。

私は、修士課程の一年のときに中東学会に入会しましたが、そのときには、まだ研究テーマも決まっておらなかったもので、論文の執筆など程遠い状態でした。しかし、先生、友人に助けられ、アラビア語の文献を読みながら研究を続け、いくつかの成果を発表することができたことは幸せでした。

今回の論文は、私の今までの研究の集大成となることを目指しまして、博士論文で扱った宇宙論と、博士課程修了後の研究である婚姻論、セクシュアリティの研究を統合させたものです。マッキー、ガザーリー、イブン・アラビーという三人のスーフィーを取り上げ、それぞれの思想的背景である存在論の違いによって、性の議論も異なっていることを明らかにし、スーフィズムの思想史の変遷をたどりました。

今後も中東研究に貢献し、精進を重ねてまいります所存ですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(受賞対象論文: Aoyagi Kaoru, “Transition of Views on Sexuality in Sufism: Al-Makkī, al-Ghazālī, and Ibn al-‘Arabī,” *AJAMES* 22 (1) (2006): 1-20.)

日本中東学会第 24 回年次大会のお知らせ

来年度の年次大会は、千葉大学で開催されることになりました。

千葉大はオスマン帝国研究、あるいは東南アジアのイスラーム研究等の分野で素晴らしい先達が教鞭をとられた伝統を誇っていますが、現在の専任スタッフのなかで中東学会会員は二名のみ！大会運営にあたっては、千葉周辺の大学・研究機関、研究者の方々のお力を借りるほか、学内の(必ずしも中東研究者ではない)歴史学・思想史・国際政治等の分野のスタッフの協力も得て、進めていくこととなります。いろいろ至らぬ点もあると思いますが、どうかよろしくご参加下さい。

また、企画内容等についてアイデアや提言がありましたら、どうぞ積極的にお寄せ下さい。

開催日時： 2008年5月24日(土)、25日(日)

開催場所： 千葉大学 西千葉キャンパス

実行委員会

委員長： 栗田禎子

事務局長： 秋葉淳

委員： 石田憲(国際政治)、石田靖夫(フランス思想)、上村清雄(ヨーロッパ美術史)、小沢弘明(中・東欧史)、千代崎未央〔以上、千葉大学〕、赤堀雅幸、岩崎葉子、私市正年、鈴木均、福田安志、水口章、吉田京子

例年通り、大会 1 日目は公開講演もしくはパネルディスカッションと総会、2 日目は研究発表となります。

研究発表を希望される方は、2007 年9月15日～12月10日の間にご応募ください。その際、①発表のおおよその骨子(日本語で 400 字、欧文の場合は 200 words 程度。内容とテーマが分かるもの。正式の「要旨」は、プログラム確定後、改めて発表予定者に執筆をお願いすることになります)を添付して下さい。②使用希望機器をお申し出下さい(プロジェクター等の台数に限りがありますが、可能な限りご希望に応えるようにします)。③託児所の利用を希望される方は、お申し出下さい。

応募方法については、次号以降のニューズレターや学会メーリングリスト、ホームページでも周知していく予定です。

(第 24 回年次大会実行委員長 栗田 禎子)

連絡先

日本中東学会第24回年次大会実行委員会(事務局)

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学文学部史学科 秋葉淳研究室

TEL & FAX: 043-290-3630

E-mail: james2008@l.chiba-u.ac.jp (8月以降開通予定)

理事会・総会報告

【第3回理事会報告】

日時: 2007年5月12日(土)

場所: 東北大学川内北キャンパス・マルチメディア棟

出席: 私市正年会長、赤堀雅幸、飯塚正人、大塚和夫、大稔哲也、加藤博、栗田禎子、黒木英充、酒井啓子、桜井啓子、東長靖、羽田正、林佳世子、山岸智子、山口昭彦の各理事

[議題] (議題の詳細については6~11ページの総会報告をご参照ください)

1. 特任理事・監事の承認について
2. 2006年度事業報告・2006年度決算報告について
3. 2007年度事業計画・2007年度予算案について
4. AJAMES 第22号編集報告・第23号編集計画について
5. 会則細則改正について
6. 2007年度公開講演会について
7. 会員動向について
8. 広報情報担当理事選任について
9. 総会資料確認

[理事の分掌(特任理事も含めて)]

- ・ 会長: 私市正年
- ・ 事務局長: 赤堀雅幸(事務局は上智大学アジア文化研究所におく)
- ・ AJAMES 編集: 林佳世子、羽田正、山口昭彦
- ・ 国際交流: 栗田禎子、酒井啓子、東長靖
- ・ 財務: 飯塚正人
- ・ 企画: 加藤博、黒木英充、桜井啓子

- ・ 渉外：大塚和夫、大稔哲也
- ・ ニュースレター：山岸智子
- ・ データベース：飯塚正人
- ・ ホームページ：羽田正

【日本中東学会第23回年次総会報告】

日時：2007年5月12日(土)

場所：東北大学川内北キャンパス・マルチメディア棟6階大会議室

出席：当日出席者101名、委任状提出131名、計232名

(会員数711名、定足数5分の1の143名により、総会成立)

松本弘会員の司会により、議長として北澤義之会員、書記として佐藤健太郎、守川知子両会員、議事録署名人として田村愛理、保坂修司両会員が選出された。

理事会によって提出された以下の議案が審議され、いずれも採択された。

1. 2006年度事業および活動報告

飯塚正人前事務局長および各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 理事会報告および事業報告(報告：飯塚正人前事務局長)

- ・ 第22回年次大会を開催した(2006年5月13日～14日、東京外国語大学)。
- ・ 第10回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(1)——教育現場の中での中東・イスラーム」(2006年7月25日、明治大学アカデミーコモン会議場)および、第11回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(2)——地方における中東・イスラーム」(2006年11月18日、山口市市民会館小ホール)を開催した(文部科学省科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成による)。なお、第11回公開講演会に関連して、公開研究会「日常のなかに中東を掘り起こす(2)——地方における中東・イスラーム」(2006年7月28日、一橋大学東キャンパス)を開催した。
- ・ 『日本中東学会年報』(AJAMES)第22巻第1号、第22巻第2号を編集・出版した(日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開促進費の助成を受けた)。
- ・ アジア中東学会連合(AFMA)第6回大会“Middle East Perspectives from East Asia: Diversifying the Middle East and Islamic Studies”(2006年5月13日～14日、東京外国語大学)を開催した(日本学術振興会国際交流事業国際研究集会の助成を受けた)。
- ・ 第2回中東学会世界大会(2006年6月、アンマン)に協力し、パネル組織と派遣を行った(国際交流基金知的交流会議助成プログラムの助成を受けた)。
- ・ 韓国中東学会第15回国際会議に参加した。

- ・「日本における中東研究文献データベース 1989-2006」(日本語版、英語版)の新規業績などの調査・更新を行い、学会ホームページで公開した(文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費の助成を受けた)。
 - ・ニューズレターを発行した(和文3回〔総頁 98 頁〕)。
 - ・学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報(2006 年度登録者数 544名)を行った。
 - ・AJAMES を海外研究機関へ発送した。
 - ・AJAMES を国立情報学研究所のサイト(CiNii)に掲載し、電子ジャーナルとして公開した。
 - ・日本中東学会奨励賞の規定を作成し、第1 回の受賞者を選考した。
 - ・第12期役員選挙を実施した。
 - ・資料・写真展「若きアフガニスタンの記録——農業技術指導員尾崎三雄氏収集コレクションを中心に」(2006 年7月5日～8月1日、日本貿易振興機構ビジネスライブラリー内アジ研図書館サテライト(東京都港区)・11月1日～11月26日、防府市立防府図書館)および関連講演会「若きアフガニスタンの記録」(7月18日、日本貿易振興機構ビジネスライブラリー)を開催した(ともに日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館との共催)。
 - ・日本中東学会会計規程をはじめとする経理関係諸規則を策定・整備した。これは、日本学術振興会から科学研究費補助金に関連して、経理規則提出の要求があったためである。
 - ・地域研究学会連絡協議会の幹事組織としての相互交流および提言を行った。
 - ・会員の増減:入会者 37名、退会者 8名、除籍者 16名。2007年3月31日現在の会員数705名(正会員529名; 生会員176名)。
- (2) AJAMES 第22巻第1号、第22巻第2号編集報告(報告:林佳世子 AJAMES 編集委員長)
- ・AJAMES 第22巻第1号、第22巻第2号が無事刊行された。
- (3) 2006年度決算報告(報告:飯塚正人前事務局長)(決算については11ページの表を参照)
- ・前納率が高く、会費収入により、ほぼ支出をまかなうことができた。
 - ・滞納会費をかなり回収できたことと、会費の前納率が良好だったことにより収入は増加した。
 - ・AJAMES 広告費(Brill)3号分がいまだ振り込まれていない
 - ・AJAMES のNII登録にともない、NII-ELS 著作権料の収入があった。
 - ・通信費の超過は、総会委任状を2006年度分・2007年度分の2回印刷したこと、および会員名簿情報の収集作業があったことによる。
 - ・消耗品費の超過は、大会用名札購入および事務局封筒購入による。

- ・ AJAMES 編集費の超過は、編集体制の変更によりアルバイト費が増大したことによる。
 - ・ 選挙費用の超過は、会員数が前回より多かったことによる。
- (4) 監査報告(報告:清水学監事)
- ・ 山下王世監事とともに会計監査を行った結果、決算についてはすべて適正であった。
 - ・ 昨年度の監査報告で指摘した会計年度の起算日・決算日が年度によって異なっている件については、今年度からは3月31日締めで固定された。

2. 第12期役員選挙報告および理事の任務分掌、特任理事・監事の選出

(1) 第12期役員選挙報告(報告:飯塚正人前事務局長)

- ・ 本総会には選挙管理委員の出席の都合がつかなかったため、第12期役員選挙について飯塚正人前事務局長の代理による報告があった。
- ・ 評議員選挙は有権者数413名で実施され、投票者数123名(うち有効票117、無効票4、白票2)、投票率は29.8%であった。選出された評議員の詳細については、ニューズレター110号を参照されたい。
- ・ 新評議員による理事選挙は有権者数60名で実施され、投票者数41名(うち有効票40、無効票1、白票0)、投票率68.3%であった。
- ・ 評議員選挙の投票率はここ数回30%前後である。改善したい。

(2) 理事の任務分掌報告(報告:赤堀雅幸事務局長)

- ・ 第3回理事会で承認された、理事の任務分掌について報告があった。また、特任理事として東長靖会員と山口昭彦会員を選出、監事として後藤明、八木久美子両会員の選任が提案された。

3. 2007年度事業計画

赤堀雅幸事務局長および各担当理事より、総会資料に基づき、2007年度事業計画が提案され、承認された。

(1) 事業計画一般について(説明:赤堀雅幸事務局長)

- ・ 第23回年次大会を開催する(2007年5月12日～13日、東北大学)。
- ・ 第12回公開講演会「中東・イスラーム世界の素顔を知る」(2007年6月30日、千葉大学けやき会館大ホール、「NIHUプログラム・イスラーム地域研究」と共催)、第13回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(3)——世界史教育と中東・イスラーム」(2007年10月27日、信州大学教育学部大教室)を開催する。
- ・ 『日本中東学会年報』(AJAMES)第23巻第1号、第23巻第2号の編集・出版を行う(日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開促進費の助成を受ける)。

- ・「日本における中東研究文献データベース 1989-2007」(日本語版・英語版)新規業績の調査・更新、学会ホームページにおける公開を継続する(「NIHUプログラム・イスラーム地域研究」東洋文庫拠点と連携)。
 - ・ニューズレターを発行する。
 - ・学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
 - ・海外の関連学会との交流を促進する。
 - ・AJAMESの普及を促進するため、電子ジャーナル化(国立情報学研究所サイトCiNiiへの掲載)を継続して推進する。
 - ・日本中東学会奨励賞を授賞する。
 - ・地域研究学会連絡協議会の幹事組織としての相互交流や提言を実施する。
- (2) AJAMES 第23巻第1号、第23巻第2号編集計画(説明:林佳世子 AJAMES 編集委員長)
- ・AJAMES 第23巻第1号は、本年7月刊行予定である。第23巻第2号の投稿締め切りは6月20日であり、従来は6ヶ月間での編集・出版を試みてきたが、今後は7ヶ月の期間をあてることとする。よって第23巻第2号は2008年1月の刊行予定である。
 - ・長澤栄治、栗田禎子、長谷部史彦各委員に代わって、加藤博、羽田正、池田美佐子各会員を編集委員とする。
 - ・山口昭彦委員を副編集長とする。
 - ・書評および博士論文要旨の充実を目指す。
- (3) 2007年度予算案(説明:赤堀雅幸事務局長)
- ・収入の部で、2004年度分の年会費収入がゼロとなっているのは、「会則細則で除名対象とされる3年以上の会費滞納者の会費は年会費収入予算に計上しない」という2004年度総会における決定を反映したものである。
 - ・収入の部で、AJAMES 広告費が昨年度予算より減額されているのは、Brill 出版社からの送金がないため、同社の広告掲載を第22巻第2号から停止したためである。未回収となっている第21巻第1号～第22巻第1号の3号分については予算を計上し、回収に努める。
 - ・本年度から初めてNII-ELS 著作権料を予算に計上した。
 - ・支出の部では、アルバイト謝金、消耗品費、交通費、事務局移転費を増額した。
 - ・AJAMES印刷製本費が減額されているのは、業者が提出した見積もり額が前年度を下回ったのに対応している。
 - ・ニューズレター等発行費には、会員名簿作成費が含まれる。
 - ・国際交流費が減額されているのは、本年度はAFMAやWOCMESといった国際会議が開催されないためである。
 - ・インターネット広報費の増額は、学会ホームページの充実を目指すためである。

- ・ 公開講演会開催費は、科学研究費補助金による助成金が不採択のため、大幅に増額された。
- ・ 中東文献データベース更新費は、「NIHUプログラム・イスラーム地域研究」東洋文庫拠点との連携のため、増額された。

4. 会則細則の改正

休会規定削除について、会則細則の改正が承認された。(説明:赤堀雅幸事務局長)

- ・ 改正趣旨: 昨年度の総会で、「会則細則 I-4 休会」を廃止したにもかかわらず、「会則細則 I-1 会員の手続き」の項目に「休会」の語が残ってしまった。これは単純な事務的ミスであり、本年度の総会で改めて休会規定削除にともなう細則 I-1 の改正が必要である。

<細則>

現行	改正案
I. 会員について 1. 会員の手続き 入会、諸変更、 <u>休会</u> 、退会届は必ず提出することとする。	I. 会員について 1. 会員の手続き 入会、諸変更、退会届は必ず提出することとする。

第 23 回年次大会報告

【大会プログラム】

- 5月12日(土) 公開講演・公開シンポジウム、総会
 (東北大学川内北キャンパス・マルチメディア棟 6 階大会議室)
- 13:00 登録開始
- 14:00～15:10 開会の辞(私市正年会長)、歓迎の辞(東北大学総長)
 公開講演「『NIHU プログラム・イスラーム地域研究』は何を目指すのか」
- 15:20～17:10 公開シンポジウム「イスラームと中東研究をめぐって」
- 17:20～18:20 日本中東学会総会、日本中東学会奨励賞授賞式
- 18:30～20:00 懇親会(川内南キャンパス文系食堂)
- 5月13日(日) 研究発表、特別部会
- 9:30～12:20 午前の部(休憩 10:50～11:05)
- 13:30～17:05 午後の部(休憩 15:30～15:45)

2006年度決算

収入	06年度予算	06年度決算
2005年度よりの繰越金	3,798,265	3,798,265
年会費	7,104,000	4,623,000
正・学生会員	7,104,000	4,623,000
2004年度分	400,000	200,000
2005年度分	684,000	176,000
2006年度分	1,388,000	892,000
2007年度分	4,632,000	3,244,000
2008年度以降分	0	111,000
賛助会員	0	0
その他	1,520,100	1,670,454
科研費出版助成金	1,200,000	1,200,226
利子	100	1,853
AJAMES販売代金	200,000	447,140
海外郵送費実費	20,000	7,640
AJAMES広告費	100,000	0
NII-ELS著作権料	0	13,595
収入合計	12,422,365	10,091,719

2007年度への繰越金内訳	5,217,830
郵便振替口座	81,041
三井住友銀行口座	5,131,489
現金	5,300

支出	06年度予算	06年度決算
事務局費	1,160,000	911,897
アルバイト謝金	900,000	548,295
通信費	50,000	148,530
消耗品費	100,000	204,812
会議費	50,000	2,400
交通費	50,000	0
振込手数料	10,000	7,860
事業費	4,950,000	3,961,992
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	40,000	0
AJAMES22号編集費	300,000	374,413
同欧文校閲費	300,000	137,203
同印刷製本費	2,500,000	2,224,005
編集委員会交通費	150,000	132,710
ニューズレター発行費	400,000	292,215
AJAMES/NL発送費	400,000	232,320
AJAMES海外発送費	100,000	107,015
選挙費用	100,000	139,232
国際交流費	200,000	0
インターネット広報費	50,000	0
公開講演会開催費	50,000	17,879
学会奨励賞運営費	50,000	0
中東文献DB更新費	10,000	0
地域研究会協議会分担金	0	5,000
支出合計	6,110,000	4,873,889
2007年度への繰越金	6,312,365	5,217,830
総計	12,422,365	10,091,719

(単位:円)

2007年度予算

収入	07年度予算	06年度予算
2005年度よりの繰越金		3,798,265
2006年度よりの繰越金	5,217,830	
年会費	9,031,000	7,104,000
正・学生会員	9,031,000	7,104,000
2004年度分		400,000
2005年度分	488,000	684,000
2006年度分	820,000	1,388,000
2007年度分	1,508,000	4,632,000
2008年度分	6,215,000	
賛助会員	0	0
その他	1,555,500	1,520,100
科研費出版助成金	1,200,000	1,200,000
利子	500	100
AJAMES販売代金	250,000	200,000
海外郵送費実費	20,000	20,000
AJAMES広告費	75,000	100,000
NII-ELS著作権料	10,000	
収入合計	15,804,330	12,422,365

年次大会特別基金	454,611
年次大会時託児所特別基金	32,015

支出	07年度予算	06年度予算
事務局費	1,435,000	1,160,000
アルバイト謝金	1,000,000	900,000
通信費	50,000	50,000
消耗品費	200,000	100,000
会議費	50,000	50,000
交通費	75,000	50,000
振込手数料	10,000	10,000
事務局移転費	50,000	0
事業費	4,905,000	4,950,000
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	40,000
AJAMES編集費	350,000	300,000
同欧文校閲費	300,000	300,000
同印刷製本費	2,200,000	2,500,000
編集委員会交通費	200,000	150,000
ニューズレター等発行費	500,000	400,000
AJAMES/NL発送費	400,000	400,000
AJAMES海外発送費	100,000	100,000
選挙費用	0	100,000
国際交流費	100,000	200,000
インターネット広報費	100,000	50,000
公開講演会開催費	150,000	50,000
学会奨励賞運営費	50,000	50,000
中東文献DB更新費	50,000	10,000
地域研究会協議会分担金	5,000	0
支出合計	6,340,000	6,110,000
2007年度への繰越金		6,312,365
2008年度への繰越金	9,464,330	
総計	15,804,330	12,422,365

(一部の発表タイトルについては、大会当日の変更を反映していない可能性があります。次号に訂正を掲載しますので、該当する発表者の方は事務局までご連絡ください。)

第1部会

- (I-1) 三代川寛子(上智大学大学院)「現代エジプトにおけるコプト・キリスト教徒」
- (I-2) 相島葉月(オクスフォード大学大学院)「現代エジプトにおけるイスラーム的知の生産と消費」
- (I-3) 鳥山純子(お茶の水女子大学大学院)「現代カイロのメイク事情——ブランド志向に見る女性らしさとイスラーム」
- (I-4) 後藤絵美(東京大学大学院)「ニカーブを手にするまで——現代エジプトにおけるムスリム女性のヴェール着用と宗教権威」
- (I-6) 河野瀬功(神戸大学大学院)「ナセル政権の対米政策とエジプト・米国関係(1957-1960)——対立と協調」
- (I-7) 柏木健一(筑波大学北アフリカ研究センター)「エジプトの人口動態と経済成長」
- (I-8) 岡戸真幸(上智大学大学院)「アホワ(伝統的喫茶店)とガマイーヤ(同郷者団体)——エジプト、アレクサンドリアの出稼ぎ労働者によるネットワーク拠点の形成」
- (I-9) 竹村和朗(企業勤務)「砂漠開拓からみる現代エジプト——人々と国家の関わり合いを考えるための一試論」

第2部会

- (II-1) 吉岡明子(日本エネルギー経済研究所中東研究センター)「イラクにおける戦後民主化プロセスの蹉跌」
- (II-2) 山尾大(京都大学大学院)「1960・70年代イラクにおける政治変動とシーア派——サドルの思想変容をめぐって」
- (II-3) 見市建(岩手県立大学)「イスラーム主義の世界潮流における東南アジアのジャマーア・イスラミア——エジプトを念頭に」
- (II-4) 大庭竜太(京都大学大学院)「現代トルコにおけるクルド・イスラーム主義の潮流とクルド人問題」
- (II-5) 細田和江(中央大学大学院)「ヘブライ文学におけるカナン運動の意義」
- (II-6) 錦田愛子(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)「ヨルダンのパレスチナ住民にみられる帰還権をめぐる意識」
- (II-7) 矢野可奈子(京都大学大学院)「英国委任統治下パレスチナにおける農民と大地の関係性——難民1世の女性たちへの聞き取りから」

- (II-8) 池田有日子(日本学術振興会特別研究員/京都大学地域研究総合情報センター特別研究員)「1930年代におけるアメリカ・シオニスト運動指導部のパレスチナへの対応」
- (II-9) 金城美幸(立命館大学大学院)「1990年代イスラエルにおける『ポスト・シオニズム』論争についての考察」

第3部会

- (III-1) 小野仁美(東京大学大学院)「イスラーム法における子育てをめぐる雇用契約」
- (III-2) 嶺崎寛子(お茶の水女子大学大学院)「多元的言説としてのファトワー——現代エジプトの“イスラーム電話”を事例として」
- (III-3) 長岡慎介(京都大学大学院)「国際金融システムにおける現代イスラーム金融の役割と特徴——オイルマネー命題からの考察」
- (III-5) 岡井宏文(早稲田大学大学院)「在日ムスリムのネットワークの現在——モスクを中心として」
- (III-6) 店田廣文(早稲田大学)「在日ムスリム学生の信仰と生活」
- (III-7) 小島宏(国立社会保障・人口問題研究所)「『ムスリム』男性と日本人女性配偶者の労働供給——2000年国勢調査個票の分析」
- (III-8) ブカーリ・イサム(早稲田大学大学院/アラブ・イスラーム学院)「サウジアラビアにおける科学・技術の現状とその課題」
- (III-9) 和氣太司(日本学生支援機構)「サウジアラビアにおける技術教育改革の展開と課題」

第4部会

- (IV-2) 宮下遼(東京大学大学院)「『酒の書』に見る酒宴——16世紀オスマン朝詩人たちを中心に」
- (IV-3) 吉田達矢(明治大学大学院)「『改革勅令』発布後のオスマン政府の非ムスリム統合政策——『東方正教総主教座法』作成に関する考察」
- (IV-4) 三沢伸生(東洋大学)「日本・オスマン朝関係史にかかわる文書史料」
- (IV-5) 森下信子(東京大学大学院)「中世イスラム世界へのヘレニズム的影響の一側面——『サラーマーンとアブサール物語』」
- (IV-6) 柳谷あゆみ(東洋文庫研究部イスラーム地域研究資料室)「ザンギー朝ヌール・アッディーンの対スグル、ディヤール・バクル政策」
- (IV-7) 中町信孝(日本学術振興会特別研究員/早稲田大学大学院)「境界を生きた知識人——アイニー年代記中の自伝的情報」
- (IV-8) 五十嵐大介(日本学術振興会特別研究員/東洋文庫)「マムルーク体制とワクフ」

第5部会

- (V-2) 宮澤栄司(上智大学アジア文化研究所客員研究員)「中央アナトリアのチェルケス人にみる社会的記憶」
- (V-3) 外川昌彦(広島大学)「中世のインド社会におけるイスラームとの遭遇——チャイタニヤ(1486-1533)の事跡から」
- (V-4) 登利谷正人(上智大学大学院)「アフマド・シャー・ドゥッラーニーのインド遠征について」
- (V-5) 杉山隆一(慶應義塾大学大学院)「サファヴィー朝期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」
- (V-6) 小澤一郎(東京大学大学院)「軍制改革と近代イラン——アッバース・ミールザーの西欧化改革」
- (V-7) 前田君江(東京大学)「1946年『イラン・ソ連文化関係協会作家会議』に見る文学イデオロギーと新体詩」
- (V-8) 岩坂将充(上智大学アジア文化研究所共同研究員)「トルコにおける軍とアタテュルク主義——転換点としての1971年クーデタ」

第6部会

- (VI-1) 高橋圭(上智大学アジア文化研究所客員研究員)「廟、ザーウィヤ、テッケを巡る騒動——20世紀初頭エジプトにおけるタリーカとワクフ行政」
- (VI-2) 私市正年(上智大学)「Zāwiya al-Hāmil と独立戦争——植民地期アルジェリアのスーフィー教団・聖者崇拜の役割再考」
- (VI-3) 高尾賢一郎(同志社大学大学院)「現代シリアのタリーカ——ダマスカスのナクシュバンディーヤ、シャイフ・アフマド・クフターローの事例を中心に」
- (VI-4) 縄田浩志(鳥取大学乾燥地研究センター)「スーダンの飢餓・内戦へのまなざし——写真〈ハゲワシと少女〉撮影時の状況を探る」
- (VI-5) Abdul Latif Zoya (Graduate School of Tokyo Metropolitan University) “The Elements of Urban Sector of Old Saida: The Hamoud Family Architecture and Heritage”
- (VI-6) 竹田敏之(京都大学大学院)「現代標準アラビア語の形成とアラビア語アカデミーの役割」
- (VI-7) 鷺見朗子(京都ノートルダム女子大学)「アラビア語教授法研究の動向」

特別部会 I (日韓パレスチナ/イスラエルセッション) *Aspects of Palestine/Israel Conflict Viewed from Korea and Japan*

Chair: Nagasawa Eiji (The University of Tokyo, Tokyo)

Panelists:

Choi Chuang-Mo (Konkuk University, Seoul) “The Perspective of the Editorials on Israeli-Palestinian Conflict: Focusing on Four Major Korean Newspapers”

Usuki Akira (Japan Women’s University, Tokyo) “A Recent Trend of Studies on Ethnic and National Relations in Israel: A Japanese View”

Hong, Meejeong (Hankuk University of Foreign Studies, Seoul) “Middle East Peace Negotiations and the Israeli Settlements”

Sugase Akiko (The Graduate University of Advanced Studies, Hayama) “Current Palestinian Studies in Japan”

Commentator: Tamura Yukie (Tsuda College, Tokyo)

特別部会Ⅱ（日韓イラン・セッション）*Iran and Surrounding World through Comparative Approach*

Chair: Yoshimura Shintaro (Hiroshima University, Hiroshima)

Panelists:

Chang Byung-Ock (President of KAMES, Hankuk University of Foreign Studies, Seoul) “Iranian Studies in Korea and Korean Studies in Iran”

Michael Penn (The University of Kitakyushu, Kitakyushu) “Tokyo’s Energy Strategy in the Gulf Region after Azadegan”

Arezoo Fakhrejehani (Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo) “Exchanges beyond Arras River: The Border of Iran and Republic of Azerbaijan”

Commentator: Sakai Keiko (Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo)

【公開講演】

佐藤次高(早稲田大学) 「『NIHU プログラム・イスラーム地域研究』は何をめざすか」

昨年度より始まったネットワーク型の国際共同研究「NIHU プログラム・イスラーム地域研究」について、佐藤次高・研究代表が概要を紹介した。この共同研究は、人間文化研究機構(NIHU)と早稲田大学・東京大学・上智大学・東洋文庫・京都大学の5大学・研究機関とを結んで実施されるもので、佐藤次高・研究代表からは、継続性を持った拠点形成を目指していることなど、この共同研究の要点がいくつか紹介された。
(佐藤 健太郎)

【公開シンポジウム】

パネルディスカッション 「イスラームと中東研究をめぐる」

司会：長澤栄治(東京大学)

パネラー：羽田正(東京大学)、加藤博(一橋大学)、酒井啓子(東京外国語大学)(発言順)

この企画は大会事務局の発案であったが、司会を引き受けた側の趣旨としては、「イスラーム世界」概念をめぐる議論にとどまらず、研究実践の日常で直面するイスラームをめぐるより広範囲の諸問題について各氏に有意味な論点を出してもらうことにあった。羽田氏は、改めて『イスラーム世界の創造』の執筆に当たったの問題意識を述べ、とくに歴史の叙述そのものがイデオロギーの実体化に貢献する点を意識すべきだと論じ、「世界は一つ」とする理念の世界史を書くための共同研究をしていると今後の展望を述べた。加藤氏は、司会者の要望に素直に対応し、イブン・ハルドゥーンの新読から「イスラーム文明」論の展開へと進み、さらには現在流布しているイスラームがらみの言葉や概念を脱構築するために「イスラーム世界」概念を積極的に使うようになったという、自身の研究の来歴を回顧された。最後に酒井氏は、日本の報道にみる「イスラーム」理解について厳しく批判的に描写し、その背後にあるものについて注意を喚起した。その後、刺激的な質問を含めて会場とのやり取りがあったが、相互理解のためには時間の制約が大きかった。ただし、時代状況と研究環境、自身の研究史の間関係について自省的であるべきという各パネラーの主張はある程度伝わったのではないかと思う。（長澤 栄治）

【研究発表会場から】

第1部会

第1部会は三代川寛子氏、相島葉月氏の発表で始まった。聴衆はそれぞれ31名、29名。

三代川氏はコプト福音教会が運営するエジプト最大規模のNGO「CEOSS (Coptic Evangelical Organization for Social Services)」の活動、とりわけ文化開発部がアズハル機構・ワクフ省と提携し、イスラーム中道派の思想家やワサト党の協力も得て実施している文化間対話フォーラムの中身を分析することで、宗教を排除しない形の多元主義や人権意識の社会的定着を目指す少数派コプト(エジプトのコプト人口の2~3%)の思想を明らかにした。一方、相島氏はフランス留学帰りの元アズハル総長アブドゥルハリーム・マフムード(1910-78)が1960年代にスーフィーとなって以降、エジプト社会に広めようとしたスーフィズムとそのダアワ戦略について考察した。識字率の向上に支えられたマスメディアの興隆は、旧来のシャイフ=ムリド関係を嫌い、文献を通じてのイスラーム知識獲得を望む新たな教養層を産み出す結果となったが、マフムードは彼らの趣向に合ったスーフィズムを提供する一方、ラジオなどにも出演して自身のスーフィー体験を語るなかで、「現代のガザリー」と称されるほどの大衆的支持を得たのである。なお、各発表の後にはそれぞれ3~4名の聴衆による質問があり、活発な討論が行われた。(飯塚 正人)

鳥山純子氏による研究発表「現代カイロのメイク事情——ブランド志向に見る女性らしさとイスラーム」と後藤絵美氏による研究発表「ニカブを手にとるまで

——現代エジプトにおけるムスリム女性のヴェール着用と宗教権威」があった。

両氏の発表は、鳥山氏がブランド品による化粧を、後藤氏がヴェールの着用をと、そのテーマは対極にあるようにみえながら、ともにイスラーム復興の背後にある時代の流れを、女性の風俗に焦点を当てて分析しようとした。そして、鳥山氏はムスリム女性の化粧の流行の中にグローバルに展開する市場経済の展開を、後藤氏は近年におけるムスリム女性のヴェール着用の変遷の中に政治諸勢力のせめぎあいを指摘した。ともに、その分析視角は斬新で、興味深かった。(加藤 博)

第3セッションでは、2本の発表があり、最初の発表は、河野瀬功氏による「ナセル政権の対米政策とエジプト・米国関係(1957-1960)——対立と協調」であった。ナセル政権の対米政策に注目し、アメリカ外交文書を資料として、1957年から60年にかけてのシリア危機、UAR 成立、レバノン危機に焦点をあて、緊張を孕みながらも、両国が接触を図って外交関係を展開したことが明らかにされた。ナセル政権がアラブ地域の不安定化を促進したとする従来の研究に対し、ナセル政権は地域の安定化を図る「現状維持」政策を試みたとした。質疑応答では、地域の安定化や不安定化の議論はアメリカの見方であり、むしろナセルの地域秩序を視野にいれるべきなどのコメントがあった。

二つめの発表は、柏木健一氏による「エジプトの人口動態と経済成長」で、人口経済学の「人口ボーナス」という観点から現在のエジプト経済を分析したものである。「人口ボーナス」とは、人口が「多産・少死」期から「少産・少死」期に移行すると、年少従属人口比率の低下と経済活動人口比率の上昇が起こり、これが経済発展につながるというものである。エジプトでは、「少産・少死」を90年代より迎えており、雇用確保、民間投資の活性化などによってこの成果を摘み取ることができると指摘した。しかし、その後の人口高齢化にそなえて、社会安全網の整備や財政赤字の解消も必要と付け加えた。質疑応答では、「人口ボーナス」と高齢化社会を同時に視野にいた民間投資と社会安全網の整備は両立しがたいのではないかというコメントなどがあった。

前者は資料を丹念に読み込んだこと、後者は観点がユニークな点で注目すべきであり、ともに今後の展開が期待される。(池田 美佐子)

岡戸真幸氏「アホワ(伝統的喫茶店)とガマイーヤ(同郷者団体)——エジプト、アレクサンドリアの出稼ぎ労働者によるネットワーク拠点の形成」は、出稼ぎ労働者がアホワを拠点に血縁・地縁ネットワークを形成する現象に注目し、ソハーグ県農村部出身者が集まるアホワでの聞き取り調査にもとづき、彼らの労働生活や親族関係を明らかにしたうえで、アホワとガマイーヤの機能の異同を論じた。質疑応答では、現地調査による具体的な知見に高い関心が寄せられ、調査対象のアホワの一般性・特殊性や、労働者の職種と給与との関係などが議論された。

竹村和朗氏「砂漠開拓からみる現代エジプト——人々と国家の関わり合いを考

えるための一試論」は、1952年革命以来、政府主導で進行してきた開拓事業をめぐる賛否両論をふまえ、開拓の担い手に注目する視点を提起した。ベヘイラ県の一開拓村での現地調査にもとづく事例報告では、時間的制約から駆け足になったが、農地形態や経済活動の多様性を明らかにしつつ、今後の包括的研究を展望した。質疑応答では、当該研究の対象の広がりや反映し、砂漠の定義、開拓の財源、調査対象の農地の設立経緯など論点は多岐にわたった。(堀井 優)

第2部会

第2部会最初のセッションはともに現代イラクの問題を扱うものであった。一番手の吉岡明子は「イラクにおける戦後民主化プロセスの蹉跌」の題で、米国占領下におけるイラク民主化の問題点を浮き彫りにした。戦後イラクの国家体制は制度的な矛盾をはらんでいるとし、その要因をイラクのもつ特殊な歴史的構造と戦後占領政策の失敗に求め、とりわけ、サッダーム・フセイン体制下に抑えつけられていたエスニック集団がCPAによって実体化、政治化されていった過程に着目、これが暴力の連鎖を正当化し、混沌に拍車をかける背景になっていると説いた。

一方、山尾大の発表「1960・70年代イラクにおける政治変動とシーア派——サドルの思想変容をめぐって」は現代イラクの政治情勢に重要な役割を果たすダアワ党の創設者、ムハンマド・バーキル・サドルの思想に関するもの。サドルの思想的変容を時系列的に詳述し、その過程を辿りながら、サドルの、従来見過ごされてきたイラクの政治運動のなかでの歴史的な位置づけ、独創性を明らかにしたものである。とくに山尾はサドルの独創性のひとつとして「現代に実現・継続可能なイスラーム国家の制度設計」を挙げ、現代シーア派の動向にも大きな影響を与えていると主張した。

朝一という時間帯にもかかわらず、会場には多くの人が集まり、イラク問題に関する関心の高さをうかがわせた。また、両発表ともフロアのイラン研究者から活発な質問が出ており、これも現代イラクの置かれている状況を反映しているといえるのかもしれない。いずれにせよ、イラクという、学術的な研究対象としてはきわめて扱いづらい問題に、若手研究者が真正面から取り組んだという点は——イラク情勢が混迷の度を深めているにもかかわらず——今後の、この種の研究にとって明るい展望となるだろう。(保坂 修司)

第2セッションでは、見市建氏による研究発表「イスラーム主義の世界潮流における東南アジアのジャマア・イスラミア——エジプトを念頭に」と、大庭竜太氏による研究発表「現代トルコにおける『クルド・イスラーム主義』の潮流とクルド人問題」があった。

前者は、国家—社会関係やイスラーム主義の展開に関わるインドネシアとエジプトの比較を通して、ジャマア・イスラミア(JI)への評価を試みる意欲的な発表

である。JI が成立し過激化/穏健化していく過程を、政治状況や政府との関係という視点から説明し、同様の視点によるエジプト・ムスリム同胞団の事例と比較して、事例間の「分岐点」を抽出している。他の諸事例にも援用しうる極めて有意義なアプローチといえよう。ただ、思想的影響といった「直接的な関係」と、関係がなくとも見られる「現象」としての共通性が混ざり合っていたため、両者を区別した方がわかりやすかったのではないかと思う。

後者は、トルコ・ヌルジュ運動のなかのクルド人組織であるメド・ゼフラの思想を解説しながら、クルド・イスラーム主義とクルド・ナショナリズムとの関係を考察した発表である。イスラーム主義の主張と民族的なアイデンティティや政治運動との間には本質的な齟齬が生じる。その齟齬のなかで、メド・ゼフラは「クルド人問題」生成・存続に関してオスマンの精神やトルコ・イスラーム主義諸派を批判し、イスラームの公正という理念から問題の「イスラーム的解決」を訴える。その内容は、イスラーム主義と民族問題の重なりや葛藤という他の諸事例を考える上でも、非常に興味深いものであった。(松本 弘)

第3セッションでは、パレスチナ/イスラエルをめぐる三つの報告がおこなわれた。

細田和江「ヘブライ文学におけるカナン運動の意義」は、20 世紀中葉に起こった政治・文学運動である同運動(=「カナンの地」に住む集団「ヘブライ人」が「ヘブライ語」を使うことでひとつにまとまることをめざす)の展開過程を分析するとともに、その今日的意義を検討しようとするものであった。宗教ではなく地域性を重視し、また「ユダヤ性」ではなく「ヘブライ語」の使用によって生まれる絆を強調するカナン運動が、「ユダヤ人国家」建設を追求するシオニズムとは異なる方向性を持つものであったことが指摘され、パレスチナ人をも必ずしも排除しない発想を持つ点で、今日のイスラエルのあり方に対するひとつの代案を提示しているのではないかという展望が示された。討論では、①現代「ヘブライ語」形成過程自体の分析が必要ではないか、②イスラエル国家への立場をより厳密に検討すべきではないか、③「ヘブライ語文学」イコール「ヘブライ文学」なのか、④現在イスラエル国内に住むパレスチナ人たちによってヘブライ語文学が書かれつつあるという現象とは区別して論じられるべきではないか、等の意見が出された。

錦田愛子「ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰還権をめぐる意識」は、いわゆる「中東和平」プロセスにおける一つの焦点であるパレスチナ人の「帰還権」の問題を、その国際法上の根拠や歴史的背景、政治議論のされ方を確認した上で、パレスチナ人の意識に即して分析・考察しようとするものであった。報告者が2003年にヨルダンのバカア難民キャンプにおいて行なったアンケートの結果が分析され、「帰還」をめぐるさまざまな選択肢を示されても、実はどれも「選ぶ」ことはできないパレスチナ人の現状や、「無回答」という回答の意味が検討された。さらに、2003年にパレスチナ・イスラエルの和平推進派有志によって発表された「ジュネーブ合

意」において「帰還権」のほぼ全面的な放棄が打ち出されたことに対し、バカア難民キャンプで開かれた反対集会の様相も紹介・分析された。討論の中では、①アンケートの結論と報告全体の結論の関係、②調査対象としてヨルダンの難民キャンプを選ぶ理由、ヨルダンのパレスチナ人が置かれている状況、等について議論が行なわれた。

矢野可奈子「英国委任統治下パレスチナにおける農民と大地の関係性——難民1世の女性たちへの聞き取りから」は、報告者が2006年にパレスチナ自治区の難民キャンプでおこなった三人の女性からの聞き取り調査をもとに、1948年以前のパレスチナ人の生活、特に大地に深く根ざした農民としての暮らしの記憶を掘り起こそうとするものであった。語りの中で用いられる農作業に関する独特の語彙そのものが、かつてパレスチナの農民と大地とを結びつけていた絆の証となっていること、大地から引き離されたことがもたらす喪失感、子孫に記憶を語り伝えるという作業がどのような意味を持つのか、等が論じられた。討論の中では、重要な調査結果であるが、記憶が「言説」化・イデオロギー化することもあるのではないかとという批判に立ち向うためには、①聞き取り対象者の1948年当時の年齢や農作業への実際の参加度等の検証、②文献史料等で確認される史実との突き合わせ、③現実とイメージの落差への留意、等が必要であるという意見が出され、また④遊牧民の意識にも着目すべきだという指摘があった。(栗田 禎子)

池田有日子氏の報告は、1920年代から30年代においてアメリカのシオニスト指導部が、パレスチナ・アラブ人がパレスチナに多数派として存在しているという事実と、自らが掲げる民主主義的原則との齟齬にどう対応したかを検討した。民主主義的原則に立つならばパレスチナ・アラブ人を「政治的主体」として認めなければならないが、そのことはユダヤ人国家樹立の障害となる。その矛盾の中で彼らが行なったのは、政治問題を経済ないし暴力の問題に転換することだった。原理としての民主主義と、主権や領域という国民国家の枠組みに関係する議論であり、質疑応答でもこうした点が指摘された。

金城美幸氏の報告は、1980年代後半にイスラエルの学会に登場した「新しい歴史学」の顕在化とその後の後退を、「ポスト・シオニズム」の視点から検討した。「新しい歴史学」は90年代の中東和平プロセスの進展に伴う「ポスト・シオニズム」的状況を呈したイスラエル社会に積極的に受容されたが、第2次インティファダを背景に右傾化した2000年代以降、一転してイスラエル社会から排除された。そうした対比の中で、「新しい歴史学」を担った個々の学者たちが歩んだ異なった方向が分析的に提示された。(立山 良司)

第3部会

午前中のセッションでは4本の研究発表が予定されていたが、韓国からの発表者

が都合でキャンセルとなったために、3本の研究発表が行われた。最初の小野仁美氏の「イスラーム法における子育てをめぐる雇用契約」は、古典的なイスラーム法学理論、とくにマーリク法学派のそれにおける、子供の監護、授乳、乳母の雇用、クルアーン教師の雇用などについての考え方の検討を通じて、ムスリムたちが子育てに関してどのような規範意識と、それに応じた生活習慣を持っていたかを明らかにしようとするものであった。法学書だけではなくファトワー集や子供の養育に関する古典的な著述などを資料としながら、詳細な論考を重ねた研究であり、現代的にも意味を持ついくつかの点が指摘されたことが特に目立った。例えば、子供の養育についての母親の役割の重視、核家族的な家族観、さらには子供自身の福利などという考え方もあったという指摘は聞き手にとっては新鮮であった。発表者自身も述べていたように、そのような規範意識が実際の生活にどのように反映されていたのかという点と、マーリク派以外の法学派ではどのように考えられ、どう実践されていたのかが今後の課題として残るのではないであろうか。

二番目の発表、嶺崎寛子氏の「多元的言説としてのファトワー——現代エジプトの“イスラーム電話”を事例として」は、現代エジプトにおけるファトワーの持つ多元的な役割を、「イスラーム電話」というファトワーの新しい発出と受容の方法を取り上げて論じたものである。ファトワーが現代社会の中で持つ多様な意味のいくつかの側面が、きわめてヴィヴィッドに論じられており、興味深い発表であった。さまざまな現代的な社会現象に対して、一般のムスリムたち、ことに女性たちが、ムスリムとしてどう対応すべきかについて、さまざまなレベルと意味において、逡巡や迷いがあるのだという状況がよく理解できた。文化人類学的あるいは社会学的に見てきわめて興味深い研究対象であることが浮き彫りになったが、法学的な関心から言えば、やや社会現象的な側面への関心が強く出ているようで、現代のイスラームが社会生活に関わる現象を法規範的にどのように扱おうとしているのかということが見えてこなかったのが惜まれる気がした。おそらくは発表時間の短さゆえの、聞き手の側の不満なのであろう。

午前の部の最後となったのは、長岡慎介氏の「国際金融システムにおける現代イスラーム金融の役割と特徴——オイルマネー命題からの考察」という研究発表であった。この研究発表は、近年急速に発達している「イスラーム金融」のブームの背景として指摘されている二つの要因について、データの分析を通じて考察し、発表者独自の見解を提示しようとするものであった。現代イスラーム金融の急成長の二つの背景要因とは、①原油価格の高騰、②現代イスラーム金融理論の世界的標準化である。これら二点については、多くの論者が一般論としては認めているものの、実証的な分析を通じての研究という形では未だに手がけられていないことを指摘した上で、長岡氏は、バハレーンの金融機関を取り上げ、在来型金融機関とイスラーム金融機関に分類し、上記2点について実証的な分析を試みた。発表された研究の

統計学的方法論と結論の評価は別にして、どのようなデータを分析すべきかと言うことや、取り上げられた指標にしてもさらに詳細なデータを収集する必要があるという指摘など、いくつもの質問やコメントが発表後にフロアから出された。その点で聴衆の関心を大いに喚起し、今後の研究の進展に期待を持たせる発表であった。(湯川 武)

第2セッションでは、在日ムスリムに関わる3つの発表が行われた。岡井宏文、店田廣文の両氏の発表は、早稲田大学大学院人間科学研究科アジア社会論研究室が実施した「全国モスク調査」に基づくものである。岡井氏は、モスクを軸とする在日ムスリムの宗教活動の現況を概観した後、2005年、06年の2年間で国内のモスク数が急増した背景やモスクでの活動について説明した。また活発な活動で知られるタブリーギー・ジャマーアトの事例をとりあげ、「アッラーの道」と呼ばれる布教活動の詳細について報告した。

店田氏は、まず在日ムスリムの人口動態ならびに居住分析をグラフや地図によって提示した。次に在日ムスリムの生活実態や社会的ネットワークに関する調査をもとに、彼らの日本への適応の度合いや日本の生活に対する満足度の度合い、日本での信仰生活の状況などを明らかにした。

小島宏氏は、2000年の国勢調査個票の分析を通じて、日本在住の有配偶の外国人「ムスリム」男性とその配偶者の労働供給を明らかにしようと試みた。発表では、パキスタン人、バングラデシュ人、イラン人、インドネシア人などイスラーム圏から来日した人々の有配偶男性の比率、日本人との結婚比率、役員比率、夫婦の自営比率などを紹介した。分析の結果から、従来の研究で指摘されてきたように、在日パキスタン人の自営比率が高いのは、日本人の配偶者をもつ男性比率が高いことと関連があると結んだ。

いずれの報告も在日ムスリムの現状にかかわる興味深いものであり、会場からも多くの質問が寄せられた。質問の中で特に重要だと思われたのは、在日ムスリムが抱える固有の問題と日本に長期滞在する外国人一般が抱える問題との差異と共通性は何か、また研究の際に彼らを、なぜ「ムスリム」という括りで語るのか、「パキスタン人」「イラン人」として語る場合との差異は何かというものである。例えば、在日パキスタン人の労働供給状況を、外国人「ムスリム」男性という枠組みで語ることの意義について、もう少し踏み込んだ説明がほしかった。(桜井 啓子)

ブカーリ・イサム氏の報告「サウジアラビアにおける科学・技術の現状とその課題」は、産油大国であるサウジアラビアが中長期的に直面する、石油以外の産業基盤の構築、急増する若年労働力の雇用創出の課題を解決するために、教育投資やR&D投資における問題点を検討、その打開の方向を探ったものである。国際比較を通じてサウジアラビアの自然科学・技術教育の特徴を浮き彫りにしようとした。サウジアラビアの問題意識の変化と主体的な取り組みが感じられた。なお、質疑では

産油国特有の条件(いわゆる「オランダ病」という逆風)を考慮にいたれたダイナミックなビジョンが必要であることが指摘され、また国際協力のあり方に関する意見も表明された。

和氣太司氏の報告「サウジアラビアにおける技術教育改革の展開と課題」は、現地での職業教育分野での技術協力を踏まえた臨場感のある報告で、サウジアラビアにおける技術短大の整備と増設、労働市場の需要に対応した教育訓練、「国家職業技能基準」の制定、女子のための技術短大の創設を含む教育訓練対象の多様化などの試みが紹介された。また英国、ドイツ、日本の技術教育協力の特徴にも触れ、ジェッダのサウジ日本自動車高等研修所も紹介された。そのなかで国際的に通用する基準認定制度面での日本の協力の可能性も提案された。他方「サウジ人化」の進捗は期待通りではなく、技術に対する価値観・姿勢などを含む変容が必要であることが指摘された。

(清水 学)

第4部会

午前中の三報告はいずれもオスマン帝国に関わるものであった。

宮下氏の発表は、16、17世紀のトルコ古典文学における「酌人の書」というジャンルの詩作品の代表的なものを題材として、詩における酒宴と酌人の描かれ方を分析したものであった。会場からはとくにペルシア文学の影響についてもっと説明すべきだという意見が多かった。また、そもそも飲酒を神秘主義体験になぞらえて正当化する作品なのではないかという質問も出されたが、それに対して宮下氏は、詩は実際に飲酒や酒宴をしていたかどうかとは関係なく、スーフィズムの思想の表現手段であると答えた。

吉田氏は、1862年に制定された「東方正教総主教座法」の成立過程についてオスマン政府側の史料を利用して検討し、ルーム・ミット側の側が作成した草案をオスマン政府がどのように修正したかを明らかにした。文書研究の強みを生かした、政策決定過程を解明する報告だった。会場からは他のミットやエジプトのコプト教徒との比較について質問が出された。また、この法令によってミットの自治が強化されたのか、統制化されたのかという質問もあり、吉田氏は、オスマン政府は聖職者の権力を弱めて統制を強化することを目的としていた、と応答した。

三沢氏の発表は、日本・オスマン朝関係史関連の文書史料がトルコ共和国及び日本にどのように現存しているかに関するものであり、パワーポイントを使った親切な報告だった。文書の点数から見てオスマン帝国側の日本への関心がどちらかと言えば一過性のものであったことや、野田正太郎が日本人初のムスリムとして改宗した事情がオスマン文書に記されていることなど、興味深い事実の指摘があった。後者の点については質疑応答でも詳しく紹介された。また、民間の史料についての質問もあり、一部はネットオークションで入手可能とのことだった。

今回の三報告は、文学、キリスト教徒、日本との関係史といった、いずれもオスマン史研究においてはこれまで日本で蓄積の少なかった分野を扱っており、今後の発展が期待されるものである。どの報告もきっかりと制限時間内に終わり、質問も活発に出されたので、司会者としては大変楽をさせていただいたことを付け加えておきたい。

(秋葉 淳)

森下信子氏の発表「中世イスラム世界へのヘレニズム的影響の一側面——『サラマーンとアブサル物語』」は、氏自身がタシュケント東洋学研究所で発見した、イブン・シーナー版の写本研究をもとにした斬新な報告であった。森下氏は、ジャーミー版、ナースィル・アッディーン・トゥースィーの伝える要約版、イブン・シーナーの他の作品と比較検討し、その写本の資料的価値を明らかにした上で、物語の内容を詳細に検証し、アレゴリー性に関して他の先行文学と類似性が見られることを指摘した。さらに、トゥースィーによるアレゴリー解釈を紹介し、この物語に関して、ヘレニズム文化の継承と独自性の両面からさらに研究を進める必要性を指摘した。

柳谷あゆみ氏の発表「ザンギー朝ヌール・アッディーンの対スグル、ディヤール・バクル政策」では、ヌール・アッディーンと彼に服従表明していた地方王朝との関係について、当時の国際関係をも視野に入れた検討がなされた。ディヤール・バクルのアルトゥク朝については、聖戦への協力と王権維持の保障を介して、ヌール・アッディーンとの間に「インフォーマルな」保護・被保護関係が成立しており、ダーニシュバンド朝及び小アルメニア王国の場合は、ルーム・セルジューク朝やビザンツ帝国を牽制するために王朝の維持が最優先されたと柳谷氏は結論付けた。些か結論を急ぎ過ぎた処もあったが、地域による政策の違いを明解に分析した報告であった。

(太田 敬子)

まず、中町信孝氏は「境界を生きた知識人——アイニー年代記中の自伝的情報」と題しての発表であった。これまでアイニーによる年代記の精緻な文献研究を展開してきた中町氏は、今回、マムルーク朝期ウラマーの事例研究としてアイニーにアプローチした。その際に、アイニーがアラビア語圏の境界領域からの参入者であった立場を利用して、支配エリート層に食い込んでゆく姿が活写された。

次いで、五十嵐大介氏が、「マムルーク体制とワクフ」と題して発表した。マムルーク朝期にはそれまでの国有地の私有化が進行し、一方でワクフ地はそれをも吸収しつつ肥大化していった。このワクフの拡大をマムルーク軍人層との関連に特に着目しつつ論じ、その検討を通じてイクター制を含むマムルーク体制全体の変容に迫ろうとする、構えの大きい意欲的な発表であった。

(大稔 哲也)

第5部会

「奴隷の子孫にとっても歴史は資源になりうるか」という言辞で始まった宮澤報

告は、19世紀後半にロシア帝国から追放された北西コーカサス土着のチェルケス（アディゲ）人の歴史認識に関する現地調査を踏まえた詳細なものであった。報告者は、特にウズンヤイラ高原のチェルケス人集落の社会的記憶に注目し、旧支配層のワルクによる「大文字の歴史」と奴隷子孫たちが語った「小文字の歴史」の非対称性について明らかにした。質疑応答では、語りの流通や、研究者によるナラティブの再構成・固定化といった問題について議論がたたかわされた。

外川報告は、バクティ運動を代表する聖者であるチャイタニヤの伝記記述にみられる「ヒンドゥー」の用語を手がかりに、「土着性の定着」という問題を扱う意欲的なものであった。ポストコロニアルな言説がみえなくする前近代の自己意識について、興味深い指摘がなされた。ムスリムが作ったカテゴリーの受容の問題や、現代に到るインドの新興宗教の変遷について、質疑応答がなされた。

登利谷報告では、アフガニスタン草創期の君主として知られるアフマド・シャーによる4次にわたるインド遠征を手がかりに、アフガニスタンと周辺諸地域の統合と支配の正当性をめぐる諸問題が追及された。各遠征の経緯をアフガン側の史料を用いて詳細に検討しており、研究の手薄な前近代アフガニスタン研究に関する貴重な貢献と考えられる。特に、シャーのデザインしたアフガニスタン地域の統合イメージを明快に説明していた点は評価できる。

以上、3報告ともに歴史空間を扱いながらも、現代につながる明確な問題意識を有している点においてそれぞれに興味深い発表であった。その一方、一般的な問題ではあるが、「当時の文脈を現在考える意味」に囚われる危険性も秘めていると思われる。より自由な研究発展のために、今後は、個別テーマの深化はもちろんのこと、ディシプリンの相互交流を意図する様々な研究会などが開催されることが望まれよう。

（前田 弘毅）

杉山隆一報告「サファヴィー朝期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」は、イラン最大のワクフ財を所有するレザー廟について、特にサファヴィー朝後半期のワクフ文書37件を詳細に検討した。報告では、寄進者の社会的身分が上流層に偏ることや、農商業施設を中心としたワクフ物件の特徴などが明らかにされた。極めて意欲的な試みではあるが、他方、これまで使用されることの少なかった資料を利用していることに比して、資料紹介が不十分との印象を受けた。ワクフ文書集が纏められたのは主にガージャール朝期に入ってからであるため、まずは文書集それぞれの特徴を押さえる必要がある。会場では様々な分野の研究者から質問が出され、同テーマへの関心の高さとその重要性を窺わせた。

小澤一郎報告「軍制改革と近代イラン——アッバース・ミールザーの西欧化改革」は、イランの西欧化の旗手である皇太子アッバース・ミールザーによって創設された「サルバーズ」部隊を中心に考察した。その結果、新部隊のサルバーズは、改革以前の伝統的軍隊とは異なり、軍服や小銃などは支給され、兵士身分は存続する

一方、伝統的な部族単位での徴用であるなど、既存の軍隊に、西欧的外形を与えたにすぎないという結論に達した。会場からは、特に同時代のオスマン政府下での軍制改革に関連する質問が相次いだ。アッパース・ミールザーという、ガージャール朝支配体制の中では異色の皇子の軍制改革が、同時代の他の地方にどのような影響を与えたのか、あるいはその後のアミール・キャビール時代の軍制改革との比較など、更なる展開が期待される。(守川 知子)

前田君江報告「1946年『イラン・ソ連文化関係協会作家会議』に見る文学イデオロギーと新体詩」は、1946年のテヘランで開催された「イラン・ソ連文化関係協会」による「第1回イラン作家会議」の従来の文学史的背景の強調を批判し、政治的背景を考察するものである。駐留ソ連軍の存在を背景に、ソ連のプロパガンダ活動が活発となり、文化的にも旧来の体質を脱した「デモクラシー期」とされるが、イランの作家が一堂に会した会議はソ連とイランの僅かな「蜜月」の間に開かれたものとする。しかし、この作家会議は「新しい文学」を求め、特に新体詩が取り上げられたが、これに対する批判が多く、イラン文学者から出され、第2次世界大戦後のソ連の影響を受けたイラン作家会議は、きわめて政治的性格を持っていたことに注目する。

岩坂将充報告「トルコにおける軍とアタテュルク主義——転換点としての1971年クーデタ」は、トルコ共和国における1960年代から10年ごとに80年にかけて、軍が政治に介入する事態が起これ、このうちの1971年における政府への軍の圧力の、思想的背景を「アタテュルク主義」の台頭期であったとする。この「書簡による」クーデタは、統合参謀総長および陸海空の3軍総司令官を中心とする戒厳令を背景とする拡大司令官会議が実権を握り、スレイマン=デミレルの政府が左右勢力の武力対立による社会不安を解決できないとの理由で政権に介入したものである。当時の空軍司令官の回顧録や、スナイ大統領らに送られた「書簡」を検討して、アタテュルク主義の国民への浸透が将校団の中に生まれてきたと結論付けている。

(設楽 國廣)

第6部会

第1セッションの二つの発表は、ともに近代のタリーカを扱うものであった。

高橋圭氏による発表「廟、ザーウィヤ、テッケを巡る騒動——20世紀初頭エジプトにおけるタリーカとワクフ行政」は、近代的な統治機構の確立が進んでいた19世紀末から20世紀前半のエジプトにおいて、国家がどのようにタリーカ関係諸施設のワクフ財の管理を強めていったかを、文書史料にもとづいて論じた。20世紀半ばにいたるまでのワクフ局による管理のあり方が従前の伝統的な方式に従うものであったことや、行政機構とは一線を画した国王の役割など、タリーカ・国家関係のみならず、エジプト国家の近代化全体を考える上でも有益な知見が示された。

次に、発表者自身の言による限り日本中東学会始まって以来初めての「会長発表」、私市正年「Zāwiya al-Hāmil と独立戦争——植民地期アルジェリアのスー

「スーフィー教団・聖者崇拜の役割再考」があった。スーフィー教団を親フランス的な存在と捉える従来のアルジェリア研究に対し、私市は、同国でも最重要と言えるこのザウウィヤの活動の検討を行い、疑問を呈した。同ザウウィヤと反植民地武装闘争との関わり、アルジェリアの国民アイデンティティの大きな柱となったアラビア語とイスラームの教育において同ザウウィヤが果たした役割が検討され、さらに、武装闘争にかかわった個々人の経歴調査からは、対立的な存在と捉えられがちなサラフィー主義的団体とザウウィヤの両方と関係を持ったケースが多数に上ることが報告された。

部屋の不便な形状、人のやや頻繁な出入り、椅子の不足といった事態が重なり、第一発表において司会者が発表の一時中断を求めなければならない事態にいたったのは、残念、かつ申し訳ないことであった。(森本 一夫)

高尾賢一郎報告「現代シリアのタリーカ——ダマスカスのナクシュバンディーヤ、シャイフ・アフマド・クフターローの事例を中心に」は、1964年から2004年にわたりシリア・アラブ共和国のグランド・ムフティーを務めたアフマド・クフターローの「スーフィー・シャイフ」としての思想と活動を中心に、ダマスカスのタリーカ事情の概観を試みるものであった。丁寧なテキスト分析を通して彼のスーフィズムおよびサラフィー主義に対する理解を論じた上で、両者を矛盾なく共存させる「改革主義的傾向」にその思想的独創性があると述べられた。半世紀近くにわたりシリアを支配してきたバアス党政権に注目が集まってきたためか、同国のイスラーム思想やタリーカの活動は十分に研究されているとは言い難い。その意味においても今後の研究展開に大いに期待したい。

続く縄田浩志報告「スーダンの飢餓・内戦へのまなざし——写真〈ハゲワシと少女〉撮影時の状況を探る」は、1993年に欧米メディアを通して世界中に衝撃を与えた写真〈ハゲワシと少女〉をめぐる、主に日本の学校教育現場で再生産されてきたディスコースを批判するものであった。人道的・道徳的問題意識を喚起するために単純化された被害者—加害者の図式を、報告者は写真撮影の瞬間の政治情勢、自然条件、歴史環境などの観点から解体することを試みる。「写真の撮影現場に時空間的に最も近くにいた日本人」としての報告者の語りは説得力があったものの、具体的な文献やフィールド調査の成果があまり提示されず、実証研究の面で物足りなかったことが惜しまれる。質疑応答では、特定のディスコースへの痛烈な批判は、対置される別のディスコースの権力性に荷担してしまう危うさがあることが指摘された。(末近 浩太)

午後の部のトップ・バッテリーは Abdul Latif Zoya 氏で、発表題目は、“The Elements of Urban Sector of Old Saida: The Hamoud Family Architecture and Heritage”である。17世紀末に、北アフリカからレバノンのサイダへと移り住んだハムード一族は、サイダに数こそ少ないが、特徴的な建築物を残した。ハムード一族がダマスカスと

交易していたことから、彼らの建築物にはダマスカス・ハウスの影響が色濃く残る。しかし、ハムード一族は、伝統的ダマスカス・ハウスの模造品を造ったのではない。この発表では、豊富なカラー写真、建築物の平面図や鳥瞰図を用いて、ダマスカスの **Jabri House** と、サイダの **Ali Hamoud Palace** とを詳細に比較対照し、類似点だけでなく、両者間の相違点を地道に明らかにした。

続く竹田敏之氏の発表は「現代標準アラビア語の形成とアラビア語アカデミーの役割」である。この発表では、特にカイロのアラビア語アカデミーを取り上げ、アカデミーの決定がどのように学校教育に反映されていったか、すなわち、アカデミーの定めた「標準」が一般の人々にどう伝えられていき、標準語となるのかを、ハムザの正書法という具体例を通して明らかにした。配布された資料も詳細なもので、大変興味深い発表であった。

このセッション最後の発表は、鷺見朗子氏の「アラビア語教授法研究の動向」であった。まず、アラビア語学習者が、欧米でも日本においても激増していることに触れ、その教授法の変遷を追った。そして、80年代に盛んになった、**Proficiency-Oriented Approach** が、熟達度に基礎を置き、そのため、正則アラビア語のみならず、アーンミイヤも視野に入れる方向に動き、これが議論を引き起こすことになったこと、さらに、**Communicative Approach** が現れ、それでは正則語よりアーンミイヤの方が優先されるのではないか?などの疑問はあるものの、現在ではこのアプローチが主流であることが指摘された。会場からは、英語教育の専門家の観点からのコメントもあり、質疑応答の時間も非常に有意義なものであった。(栄谷 温子)

【日韓特別セッション】

I Aspects of Palestine/Israel Conflict viewed from Korea and Japan

日韓両国の第一線級のパレスチナ/イスラエル研究者が両国の研究状況の紹介と重要なイシューの分析の最先端の成果を発表した。Choi 氏の報告は、韓国の四大新聞の中東問題に関する社説の内容を分析して、韓国における中東認識の特徴を考察したものであった。白杵氏は、**Arab Jews** 概念をめぐる問題提起を手がかりに、アラブ系=東洋系ユダヤ人に関する現在の研究状況について、報告者自身の研究を含めて紹介した。Hong 氏は、過去の三つの和平プロセスの相互の連関とこれらが抱える共通した問題点として、入植地問題に焦点を合わせて考察を示した。菅瀬氏は、日本のパレスチナ研究の現況について、従来の歴史学的研究に加え、近年発展している人類学的なフィールドワークの研究を紹介した。最後にそれぞれの報告について田村氏から総括的なコメントがなされた。両国の中東問題に対する認識の比較、特定のイシューをめぐる共同研究の可能性などの今後の検討を可能にする報告がなされ、議論も生産的なものであったと思う。両国とは国内の政治社会的条件も対外政策の特徴も異なる中国を含め、今回のセッションを起点にして

今後、比較研究・共同研究が進むことを期待したい。

(長澤 栄治)

II *Iran and Surrounding World through Comparative Approach*

このセッションでは、まず韓国中東学会(KAMES)会長チャン(Chang Byung-Ock)氏から、「イランの韓国研究と韓国のイラン研究」と題する報告があり、そこでは10世紀まで遡れる貿易関係を中心とした朝鮮(当時「新羅」と中東間の歴史的関係、文化交流や朝鮮半島での「帰化」ムスリムの存在を前提に、60年代の外交関係の確立を経て第一次石油ショック後から本格的な開始を見る韓・イ間での相互対応的な研究・学術交流が80年代の停滞期を経て90年代以降拡大しているが、教育研究レベルでの相互協力関係の構築と研究環境の改善が未だ重要課題として残っている旨指摘された。

第二報告としてペン(Michael Penn)会員より、「アーザーデガーン後の湾岸における東京のエネルギー戦略」と題する発表が行われた。同報告では、リスク回避のために、従来日本はイラン、イラク、その他湾岸産油国からの石油エネルギーの輸入元をバランス良く分散させてきたが、2006年までの米国による対イラク占領政策の破綻が自明となる中で、イラクでの今後のエネルギー確保戦略が希望的観測に基づいていること、他方イランについても米国の政治的圧力からアーザーデガーン油田への関与を自ら放棄し、その点で対イラン政策に対する明確な方向性が失われており、今や日本は自由貿易協定締結提案に象徴される、より積極的な対GCC政策を進めている状況にあることが指摘された。

「アラスカ、イラン・アゼルバイジャン共和国国境を越えた交流」と題するファフレジャハーニー(Arezoo Fakhrejehani)会員からの研究発表が第三報告であった。同会員は民族や宗教(の共通性を中心に据えた)教科書的な域内の「交流」の捉え方とは異なり、イラン、アルメニア、アゼルバイジャンの国境地帯での現地観察を通じて得られた興味深い事例と知見を前提に、そこで現在進行中の変化と多様性に富んだ実態を明解に説明した。そこではもはや政府の意向やイデオロギーと真っ向から対峙して止まない地域住民のプラグマティックな生活空間の新たな「創造」の躍動さえも確認できるかもしれない。

以上の報告をふまえて、酒井会員(Sakai Keiko)がコメンテーターとして本セッションのタイトルにある「比較のアプローチ」に寄せて、上記の諸報告でそれぞれ分析された対象のズレを問題にしつつ、例えば非国家アクターが国家関係やパワー・バランスに及ぼす影響、そこでの前近代的な「記憶」が果たす役割と意味について、興味深いコメントを寄せた。司会者の不慣れもあったが、短期間に組まれたセッションであったにも関わらず、いずれも興味溢れる報告であり、報告者、コメンテーター、参加者から活発な質疑応答があったことを付記しておく。

(吉村 慎太郎)

【第23回年次大会決算報告】

収入の部

参加費	201,000	201人
弁当代	88,000	88人
懇親会費(正)	535,000	107人
懇親会費(学生)	136,000	34人
錯誤振込	4,000	
本部支給金	300,000	
合計	1,264,000	

支出の部

印刷	117,302	
設営・撤収	110,913	清掃費・光熱水道費を含む
アルバイト	118,460	
事務用品	17,991	
茶菓・什器	30,618	
送料・郵送費	55,545	
交通費	1,940	
懇親会費	506,500	
弁当代	115,000	ボランティア・バイト分を含む
振込手数料	10,090	
返金	11,000	
学生慰労費	51,445	
合計	1,146,804	
残金	117,196	

(単位:円)

【大会を終えて:第23回年次大会終了の報告】

今年度大会は去る5月12～13日東北大学川内北キャンパス・マルチメディア棟で開催されました。参加者201名の大きな大会となり、会員による6部会に韓国中東学会メンバーとの共催による特別部会を加えた全7部会、発表者は53名に達しました。また、12日の公開講演、シンポジウムにも多数の会員、非会員のご来場をいただきました。この場を借りて関係者諸氏にお礼を申し上げます。一方、プログラムの誤植、特定の会場での座席の不足等のミスマネジメントもございましたので、出席者諸氏のご寛容をお願いする次第です。またさらに大きな混乱がございま

した。先ず、会場ではハンドアウトの不足が生じました。通例発表者をお願いするハンドアウト数は30部ですが、出席者は参加できない部会のハンドアウトも持ち帰りますので、場合によっては大きく不足いたしました。会場は複写機をおいていない建物でしたので、一旦不足すると増刷りしても発表には間に合いませんでした。ハンドアウト不足の問題は今回のように混乱のままにまかせるか、発表者にもっと多く用意していただくか、前日までに原稿を提出していただいて、会場で十二分の部数を確保するか判断する必要があります。

また、混乱は懇親会場で極限に達しました。予約者104名に対し、当日申込者は37名でした。出席予定者分以上の用意はしてありましたが、可能な限りの追加注文はいたしました。会場はそもそも学生食堂ですので、パーティー料理を大量に冷凍しているわけでもありません。皆様には空腹でお帰りいただくことになってしまいました。しかし、大会費決算が黒字で終わったのは偏に、パーティー出席者に会費分の料理を出せなかったことによります。あれもこれも参加者各位のご寛容をお願いしたいと存じます。 (第23回年次大会実行委員会 北川 誠一)

『日本中東学会年報』(AJAMES)編集委員会報告

『日本中東学会年報』(AJAMES)編集委員会より、ご報告いたします。

1. 22-2号刊行のお知らせ

すでに4月にお手元にとどめていることと思っておりますが、22-2号が2007年3月に刊行になりました。論文(和文3本、英文1本)のほか、特集1“Study of Regional Diversity in Egypt from Multi-Perspective Views”(英文2本)、特集2“EU Enlargement and Turkey”(英文2本)、Paper from AFMA(英文1本)、書評3本が掲載されています。21-1号、21-2号の欧文率(外国語による論文等の割合)は合計で64%となっています。AJAMESは多言語による国際誌を方針としており、また科学研究費(研究成果公開促進費)の補助を受けている関係で、一定の欧文率の達成が求められています。引き続き、特に外国語(欧米諸語、中東諸語)での投稿をお待ちしています。どうぞよろしくお願ひします。

2. 本年度の編集委員会の体制

長年にわたって編集委員を務めていただいた長澤栄治委員(前編集長)、栗田禎子委員(前副編集長)、長谷部史彦委員が退任され、新たな編集委員として加藤博委員、羽田正委員、池田美佐子委員に加わっていただくことになりました。また、本年4月より山口昭彦委員が副編集長を務めることになりました。どうぞよろしくお願ひいたします。本年度の編集体制は以下のとおりです。

編集長： 林佳世子

副編集長： 山口昭彦

国内編集委員： 青山弘之、池田美佐子、岡真理、加藤博、竹下政孝、鷹木恵子、
羽田正、松本弘、村上薫、水島多喜男、山口昭彦、山中由里子

海外委員としては、Dale F. Eickelman、R. Stephen Humphreys、Abdul Karim Rafeq
の3氏に委嘱しています。

3. 本年度の刊行予定

本年度23巻の刊行は7月(23-1号)と来年1月(23-2号)を予定しています。23-2号への投稿は去る6月20日をもって締め切りました。各ジャンルに合計19本の投稿をいただきました。また、特集についても1件の提案をいただいております。次の23-1号への投稿締め切りは本年12月20日です。会員の皆様の投稿をお持ちしております。

4. 本年度からの体裁変更

23巻より、英文要旨が論文末尾に掲載されます。従来、『日本中東学会年報』では、比較的長めのサマリー(本文言語以外の言語による)を論文の巻頭に掲載してきましたが、今後は、サマリーとは別に、英語の短い(200ワード程度)アブストラクトが、巻末に掲載されます。これは、CiNii、および、Google への対応を意図してのものです。(詳しくは、34ページをご覧ください。)

5. 博士論文の要旨掲載

AJAMES では、「中東研究博士論文要旨」を掲載しています。博士論文を提出された皆様には、その英文要旨のご提供を是非お願いします。この掲載を通じて、日本の中東研究の状況を国際的に発信できればと願っています。

6. 原稿執筆要領の遵守のお願い

一昨年度、編集委員会は AJAMES 原稿執筆要領を定め、書式に関し大幅な変更を行いました。新スタイルは21-1号より適用されています。執筆要領の最新版は学会ホームページにアップされています。執筆予定の皆さんには、学会ホームページより最新版の原稿執筆要領をダウンロードいただき、そのルールを遵守の上、ご執筆いただくようお願いいたします。20-2号までとはスタイル(書式)が変更になっておりますので、参照の際にはご注意ください。

7. 編集委員会への連絡用メール・アドレス

投稿ならびに AJAMES についての諸種のご連絡には、次のアドレスを利用しています。

ajames-editor@tufs.ac.jp

どうぞよろしく願いいたします。 (AJAMES 編集委員長 林 佳世子)

『日本中東学会年報』(AJAMES) 掲載論文へ Google でアクセス!

1. 国立情報学研究所 CiNii

今年度から、国立情報学研究所 CiNii サービスにおいて、『日本中東学会年報』(AJAMES) 20巻以降の全ての掲載論文と、1巻から19巻までの掲載論文のうち掲載承諾を得られた原稿(262件中198件)を利用できるようになりました。日本中東学会の会員は、国立情報学研究所に日本中東学会員であることを申告し、個人IDを取得すれば、無料で利用できます。なお、もともと国立情報学研究所と定額契約のある研究機関から利用すれば、個人IDは不要です。

2. Google からアクセス

さらに今年の4月9日から、国立情報学研究所(NII)でNII-ELSに搭載していた学術論文のデータ(『日本中東学会年報』も含む)には、Google および Google Scholar からアクセスできるようになりました。これにより、『日本中東学会年報』を検索するための「入り口」は飛躍的に拡大するものと思われます。

国立情報学研究所とGoogleの連携の詳細については、次のプレスリリースの記事をご参照ください。http://www.nii.ac.jp/news_jp/2007/04/300niigoogle.shtml

3. 検索方法

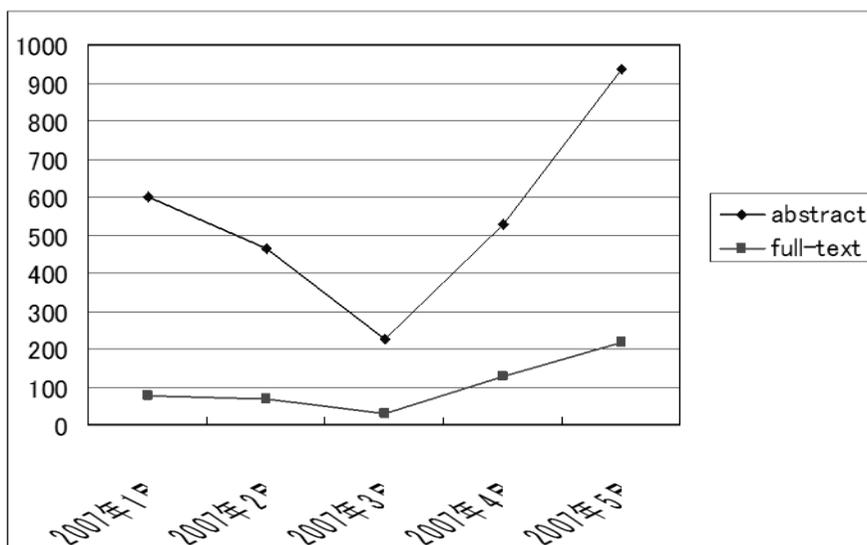
これまでの『日本中東学会年報』については、各論文の巻頭「要約」にある単語が Google 検索でヒットすれば、CiNii へ、そして PDF ファイルの本文データに誘導される仕組みになっています。

例えば、Google 検索で「アウラード・アリー」の記事を検索すると、検索結果として赤堀雅幸会員の『日本中東学会年報』第7巻掲載論文の書誌データが示されます。そしてそのURLをクリックすると、『日本中東学会年報』第7巻に掲載された論文の英文要約を見ることができます。さらに本文を読みたい人はページの右上にある「本文を読む・探す」のCiNiiのロゴをクリックすると、ID照会のページに入ります。そのページで個人IDが確認されれば、本文を読んだり、ダウンロードしたりできます。

4. 利用状況

国立情報学研究所からの利用状況報告によると、2007年に入って、5月までの間の『日本中東学会年報』掲載論文の利用度は次の通りです。

	abstract	full-text
2007年1月	599	75
2007年2月	462	66
2007年3月	225	31
2007年4月	527	126
2007年5月	936	215



5. 「抄録」について

Google 検索では、『日本中東学会年報』のなかで「抄録」にあたる部分に当該単語があるかどうかを検索します。そこで、Google で検索されるだろう単語が適切に抄録に含まれていることがのぞまれます。『日本中東学会年報』については、従来、各論文の巻頭に付されていた「要旨」を「抄録」として扱ってもらってききましたが、このニューズレターに掲載した編集委員会報告(31ページ)でも述べましたように、今後は新掲載の「英文要旨」を「抄録」として扱ってもらいます。

以上のような方法でネットワーク検索により『日本中東学会年報』へのアクセス

が増えれば、学術的に日本中東学会のプレゼンスが大きくなることを期待できるばかりではありません。会員以外が本文をダウンロードして支払う金額の一部が、日本中東学会の収入にもなります。今後さらに、『年報』掲載論文へのアクセスが増えることが望まれます。

(林 佳世子・山岸 智子)

会員の異動

【新入会員】

【所属先・連絡先の訂正・変更】

【2006年度末をもつての退会者】

寄贈図書

【単行本】

美智子文・武田和子絵『はじめてのやまのぼり——日本語・アラビア語バイリンガル版』国際交流基金、2007.

【逐次刊行物】

『現代の中東』 vol. 43、アジア経済研究所、2007.

The Japan Foundation Middle East Fellowship Program for Intellectual Exchange 2006: Development and Education, Japan Foundation, 2007.

2008 年度会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。年次大会の折に 2008 年度分の会費納入の機会を設けさせていただきましたが、未納の方は、本号ニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。2007 年度以前の会費を未納の方はどうかお早めにお支払ください。未納分の払込確認後、当該年度の AJAMES をお送りいたします。

事務局より

事務局が上智大学に移ってまいりました。不慣れな事務局はまだまだよちよち歩きです。その一方で、新会長挨拶にもありますように、学会は四半世紀近くを経て、地域研究学会として中堅以上と言えるような規模へ育ちつつあり、多くの事々が新しい判断を必要とする状況にさしかかっています。そんな学会を支えるには会員諸氏の協力が改めて必要です。どうぞよろしく願い申し上げます。

なお、ニューズレターの編集に担当の理事が付き、事務局の仕事を軽減してくれることになりました。今期は山岸智子理事がご担当くださいます。（赤堀 雅幸）

日本中東学会ニューズレター 第111号

発行日 2007 年 7 月 30 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1
上智大学アジア文化研究所気付
TEL & FAX 03-3238-3693
E メール: james@db3.so-net.ne.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>
郵便振替口座: 00140-0-161096
銀行口座: 三井住友銀行渋谷支店
普通 No. 5346808